



# 2020 年度 入賞者作品集



2020 年度  
読書推進プログラム  
入賞者作品集

# もくじ

|   |    |
|---|----|
| 受賞者一覧                                     | 1  |
| 館長講評                                      | 2  |
| 受賞作品                                      |    |
| 〔一等〕                                      |    |
| 「嫌われ者のカラス、は事実か？」<br>井野口 千紗（心理カウンセリング学科1年） | 5  |
| 〔二等〕                                      |    |
| 「自由からの逃走」を読んで<br>長内 優太（メディア学科3年）          | 9  |
| 『メモの魔力』を読んで<br>安達 美豊（心理カウンセリング学科3年）       | 12 |
| 〔佳作〕                                      |    |
| 『ふたり』を読んで<br>早乙女 寧々（韓国語学科3年）              | 15 |
| 家族の在り方について<br>井口 己暖（児童教育学科3年）             | 18 |
| 「幸せな人生における知能の必要性」<br>谷本 華古（韓国語学科3年）       | 21 |

## 受賞者一覧

### 【一等】

井野口 千紗（心理カウンセリング学科1年）

### 【二等】

長内 優太（メディア学科3年）

安達 美豊（心理カウンセリング学科3年）

### 【佳作】

早乙女 寧々（韓国語学科3年）

井口 己暖（児童教育学科3年）

谷本 華古（韓国語学科3年）

### 【参加賞】

34名

## 館長講評

読書推進プログラムに応募し、高い評価を得て受賞した学生の皆さん、おめでとうございます。

目白大学新宿図書館長として、謹んでお祝いを申し上げます。

### 1等 「嫌われ者のカラス、は事実か？」

心理カウンセリング学科 井野口 千紗さん

弟さんに拾われてきた子ガラスが自宅にやってきたことや、高校生時代のレポートのためにカラスについて調べた実体験から厄介者と思っていたカラスに対して、読書を通して思いを変化させていったことが素直に述べられており好感をもちました。さらに、心理学を学んでいるところから人間関係にまで思いを広げ発展させているところが、とっても素晴らしいと思いました。強く感銘を受けました。その点が審査員に高く評価され、今回の受賞につながったのだと思います。

### 2等 「自由からの逃走」を読んで

メディア学科 長内 優太さん

フロムの『自由からの逃走』を読んで触発されて、自分自身について考えたことが上手に述べられています。努力と無力感について考えている部分では、英語学習と課外活動での自身の努力について書かれており素晴らしいと感じました。新型コロナの蔓延による無力感と孤独感を感じる日々について述べられています。自我の統一性についても深く考えています。無力や自由による孤独を克服しようとしている点に感銘を受けました。

## 2等 『メモの魔力』を読んで

心理カウンセリング学科 安達 美豊さん

「この本を読んでメモに対するイメージが180度変わった」と述べられていますが、私もこの読書感想文を読んでメモに対するイメージが変わりました。

「メモで夢を叶える」ということについて、就職活動を始めようとしている自分自身を振り返ってよく考えられています。自分にとって幸せとは何か、自分の人生の軸を見つけていこうとする姿勢に頼もしさを感じました。焦らずじっくりと人生の軸を見つけていって欲しいと思います。

## 佳作 『ふたり』を読んで

韓国語学科 早乙女 寧々さん

交通事故で急死した姉の声が聞こえるという不思議な物語から触発されて、自分と姉との関係について深く考え、姉が実は自分を支えてくれてきたことに気づいています。さらに、弟の関係性についても思いは深まり、姉として立場からの思索が述べられています。そして、家族や姉妹、友人をつなぐ愛の素晴らしさに気づいています。困難にぶつかったら勇気をもって立ち向かいたいと述べられていることに、思わず声援を送りたくなりました。

## 佳作 家族の在り方について

児童教育学科 井口 己暖さん

家族について興味を持って『卵の緒』を読んだことを切っ掛けとして、家族の在り方について深い思索を繰り広げています。血のつながりない母親が、それをストレートに息子に伝えながら、誰よりもその息子が好きだと話す場面から、人と人との堅い繋がりを感じると述べる部分を読んでいて、あなたの感性の鋭敏さを感じました。家族同一性（ファミリーアイデンティティ）について考えさせてくれる読書感想文でした。

佳作 「幸せな人生における知能の必要性」

韓国語学科 谷本 華古さん

アメリカのSF ファンタジー小説の最高峰ネビュラ賞を受賞した『アルジャーノンに花束を』を読んだことに触発されて、幸せな人生を送るためには、必ずしも高い知能が必要なのだろうかと深く考えています。就職活動の準備を始める時期の自分自身に引きつけて、ある程度の知能が必要だということは踏まえつつ、人間にとって知能だけでは意味がないという考えに至ったわけですね。何が意味あるものかを、ぜひ追い求めてください。

審査に当たった先生方、学長先生をはじめとする関係の諸先生方、プログラムの告知から表彰までの運営をしてくださった図書館スタッフにお礼を申し上げます。

新宿図書館長 中山博夫



一等

## 「嫌われ者のカラス、は事実か？」

心理カウンセリング学科1年

井野口千紗

『カラスの教科書』雷鳥社

松原始著

2020年5月、我が家にハシブトガラスの幼鳥がやってきた。

弟が、親に捨てられ足と羽に怪我を負った子ガラスを保護すると連れてきたのだ。しかも、生まれてから数週間ほどしか経っていないという。相談もなく突然の出来事であったため、家族全員で啞然としたことは記憶に新しい。きっとあのとき私をはじめ、みんなが思っただろう。「なぜ、厄介者のカラスがうちに？」と。

そもそも、カラスには良いイメージがないのだ。高校時代、自然生物との共生によって人間はどのような利益を得ているかについて、調べたうえでレポートにまとめるという課題があった。私は、身近な自然動物ということでカラスをテーマに調べることに決め、人とカラスとの関わりという観点から資料を探した。だが、驚くほどカラスに対して好意的な文献が存在しない。ちょっと良さそう、と思った資料もいざ読み込んでみると述べていることは「カラスは害悪である」という内容であるという有様だ。結局、テーマにする生物を変えることになったのは苦い思い出だ。この経験がきっかけで、カラスに対してただでさえ悪いイメージを持っていたところへ「本の中で題材にされるほど、カラスって悪い鳥なんだ」という負の経験が加えられることとなり、私のカラス嫌いに拍車をかけることになったのだ。

私の住んでいる地域を含め、どこにでも居て見かけない日はないほど生活に身近なカラスであるが、いざ世話をするとすると知識が不十分であることに気がついた。これから一緒に過ごしていくにあたり「ゴミを漁る、黒くて怖い不

気味な鳥だから見るのも触るのも嫌だ」という私の中の像を払拭できるような、魅力を発見する手がかりを教えてくださいのようなものはないか。まずは理解しなければ。このような状況で、藁にも縋るほどの思いで手に取ったのが本書である。

この本は題名に「教科書」と銘打っているように、カラス好きの松原氏がカラスの生態や食性などの知識について目一杯語った内容を詰め込んだものとなっている。他の鳥とは違う身近さやお茶目さ、面白さをベースに人間との共通点をあげている点が特徴的だ。今まで読んできたカラスを悪者前提に話が始まる本とは、一線を画するものであるという印象を持った。本書を読んでいると、松原氏はカラスという生物をこよなく愛しているということがわかる。カラスへの愛が文章の端端から滲み出ている。固い説明というよりもむしろ、友人の話をしているようにすら感じる文体だ。さすが「カラス屋」を自称している研究者だけある。カラスに対してマイナスな感情を抱いていた私にとって、全ての内容が新鮮だった。中でも特に印象的だったのは、第一章三節「カラス君の家庭の事情」の幼鳥の生態についての話だ。

まず、幼鳥の見た目について話していきたい。カラスは全身から口の中まで真っ黒であることで有名だ。しかし、幼鳥は野生でよく見られる成体よりも見た目がかなり違っているのだそうだ。目は青みがかった薄灰色で目つきが悪い三白眼、嘴の根本は桃色、口の中は驚くほど鮮やかな赤色、頭は「お母さんに無理やり散髪されましたか？」と言っても過言ではないほどのボサボサ具合が可愛い赤ちゃんの証だそうだ。

このなんとも言えない妙な風貌を頭の中で映像化してみてもらいたい。実際に見てみたい、とつい思ってしまう人も多いのではないだろうか。そのうちの一人が私だ。その瞬間、カラスは怖い悪いと目を背けて忌み嫌う気持ちよりも「なんて面白いのだろうか、本当のことなのか実際に確かめてみたい」という好奇心が勝ったことを覚えている。この出来事がきっかけとなり、子ガラスを籠越しではあるが目視しながら世話をすることができるようになった。

「面白い奴らだなあ、と思って長く見ていると、大変かわいい鳥だとも思えてくる」とカラスの奥深さを語っている松原氏だが、私は心理学を学んでいる人間としてこの考えは人間関係にも通じるものがあると推察してみた。初めから対象に対して悪い印象を持っていると、その情報が全体の印象を引っ張ってしまうという話を集団心理の講義で聞いたことがある。そのとき、今の私はまさにその状態に陥っていると気づかされた。私はカラスのことをよく知らないにもかかわらず、世間一般でカラスの立場を基準にし、思い込みでこの生物を毛嫌いしていただけないのか。最初から絶対悪と決めつけて、関わろうとも、知ろうともしなかったではないか。今振り返ってみると、なんて自分勝手な考えだったのだろうと思う。カラスだけにとどまらず、人間との関わり合いの中でも一点の汚点に目が行きがちだ。そこに気を取られてしまうとせっかくの美点すらも霞んでしまうことはおろか、美点があることすら感じ取ることができないまま通り過ぎてしまう。これは非常にもったいないことである。それを見つけるためには、対象を知ろうとする最初の一步が肝心かつ最も困難だといえる。私は、この考えに辿り着くまでに10年以上かかってしまった。だが、この一つの気づきから子ガラスとの関わりも段々と進歩していった。

一つの長所が見つかり、他の良い点が見つかりとはよく言ったものだ。読み進めて知識をつけていくごとにカラスに対しての暗い印象は薄れていった。加えて、見方を変えることができれば、マイナスな印象をプラスとして捉えることも可能であるということとその過程で実感することになった。

一つ例を挙げたい。カラスは勝てる獲物、つまりか弱い動物ならなんでも捕食するという食性のためにずる賢い、卑怯だとよく非難される。しかし、これは生物的なやり方としては何も間違っていないのだ。なぜこう思われてしまうのかというと、体のつくりが関係している。カラスは獲物を仕留めるほど鋭利とはいえない爪や、食べることに特化して攻撃に向いていない嘴を持っているがゆえに戦闘能力が低いのだ。そのため、獲物を仕留めるときに手間取って不必要につついてしまったり、見るからに弱い相手しか襲わないという方法をとったりするのだ。このようにして背後にある事情についての知識を得ると、世

間一般のカラスのマイナス印象と合わさった結果「残虐」で「卑怯」だというレッテルを貼られてしまったのだろうという違った見方ができるようになる。

本書を読み進めて10月現在、私はなかなかカラス方面への造詣が深くなってしまった。まさかこんなことになるとは、子ガラスを保護したときにも本書を手にとったときにも想像していなかった。あんなにも嫌っていたものが、これほど好きになるなんて。

嫌いなものというのはこれからの人生で「好きになる可能性」があるものだ。それをこの『カラスの教科書』は、私に教えてくれた。その可能性を気づけるか気づけないかを決めるのは、他ならぬ自分自身なのだ。全てとは言わないが、この特殊な始まり方をした大学生活を通して、今より多くの可能性に出会うことができたなら、またそれらの子ガラスのように大好きになれるなら、とても幸せなことだろうと私は考える。

二等

## 「自由からの逃走」を読んで

メディア学科3年

長内優太

『自由からの逃走』東京創元社

エーリッヒ・フロム著 日高六郎訳

私が『自由からの逃走』を選んだのは、私の自由に対する苦手意識が理由であった。大学生にもなれば何をすることも自由になるのは当たり前事ではあるが、この自由の中で計画的な行動をするための自己管理が上手くできないのだ。一方で、やりたいことを見つけ、計画性が欠如した自発的な行動をしていたこともあった。だが、私はこれらの事実を自省し、自己の無力さや自由の孤独さを強く感じていた。そのためか、自分で考えて行動せず、誰かに管理されている方が楽ではないかとすら考えることが多々あった。その時に、私は本書を課題書リストで見つけた。全体な内容としては、近代では、生まれながらの人間の職や地位への固定が無くなり、それらは自由になった。しかし、この自由は人々に独立と孤独を与えた。この中で、個人の無力感から権威にすがりたい人間と、孤独の恐怖から逃れたいために権威を得たい人間の「逃避のメカニズム」が出来上がり、これの例としてヒットラーのナチズムが取り上げられた。人間が真に自由になるためには自発的な行動が求められており、それが彼らの孤独や無力感からの克服になるという内容である。

本書を読み、私の印象に残った内容を2つ挙げていく。はじめに、努力と無力感についての内容である。本書では「たえまない努力や仕事への衝動は、人間の無力さについての根本的な確信と矛盾するところではない。…(中略)…同時に狂おしい努力は、他の方法ではたえられない無力感に安堵をあたえるものであった。」(フロム、1965、100-101)と述べられていた。上記の内容を要約すると、努力は人間の無力さを肯定するだけで、することによって何か先のことを変

えられるわけでない。ただ、これは自由による人間の無力感に安堵をあたえる、ということである。上記の内容が印象に残った理由として私の経験を挙げる。大学生になると、4年間という莫大な時間を自由に使えるようになるため、人生の中で最も好き勝手にできる期間ではあるだろう。だが、この自由な時間が多すぎるが故に、私が1年生の頃はこの自由の中で何をして良いか全く分からない状態であり、あった。それからは、この状態から脱するべく様々な活動を自発的に始めた経験がある。実際に行った行動は、英語学習と課外活動の2つである。英語学習では、TOEICで高得点を出すこと、大学の留学プログラム選考に受かることを目標に日々努力していた。また、課外活動では、社会的経験を積むためにインターンや学生団体での活動を活発に行っていた。これらをしていた時は、たしかに自由による無力さなどを感じることは一切無く、本書の内容通り、無力感に安堵をあたえていたと考えている。だが、新型コロナウイルスの影響で自宅自粛が求められ、以前のような活動ができなくなった現在では、終わりのない漠然とした自由による無力感に安堵をあたえられるものを見つけられず、常に無力感と孤独を感じている状態である。

次に挙げるのは、自我の統一性について述べた内容である。本書では「自発的に行動できなかつたり、本当に感じたり考えたりすることを表現できなかつたり、またその結果、他人や自分自身にたいしてにせの自我をあらわさなければならなかつたりすることが、劣等感や弱小感の根源である。気がついていようといまいと、自分自身でないことほど恥ずべきことはなく、自分自身でものを考え、感じ、話すことほど、誇りと幸福をあたえるものはない。」(フロム、1965、288)と述べられていた。上記の内容を要約すると、他に合わせた自我は劣等感をあたえるが、自分自身の自我は幸福感をあたえる、ということである。上記の内容が印象に残った理由として、にせの自我と自分自身の自我の違いに共感したことを挙げる。私は、自我を持って行動することは孤独なことであり、続けるためには相当な覚悟が必要なことを知っている。なぜなら、先ほど私が述べた無力感に安堵をあたえるために行っていたことは自発的な行動でもあるからだ。だが、孤独などを感じながらも、自発的に目標に向かって行動することはやはり幸福で

あると考えている。一方、相手に合わせたにせの自我は、他への服従であると考えている。自分で考えて行動することをやめ、それらを他人に任せれば孤独などを感じることはないが、他に服従しているための劣等感を感じるだろう。実際、私が幼い頃は、親の言いなり通りに行動していた。一般的に考えれば、私は良い子だったかもしれない。また、親の言いなり通りに行動することは孤独を感じることはなく、むしろ楽でもあった。だが、子供でも自我は持っている。そのため、私のこの行動は親への服従であり、子供ながらも親に対して劣等感を感じていたと考えることもできるだろう。

ここまで私が挙げた本書の印象に残った2つの内容より、私が学生生活でこれまでにしてきたことは、自由による無力感に安堵をあたえるための努力であったが、一方で自分自身の自我を持った自発的な活動であったことが分かった。そのため、自宅自粛期間ではあるが、自由を克服し、自分自身の自我を持つために再び積極的な活動をする必要があると私は考えている。今後、私は社会人となり今まで以上に自由になり、自身の無力さや自由による孤独をより感じるだろう。これらを克服するために、自発的な行動をし続けること、自分自身の自己を持つことを意識していこうと考えている。

二等

## 『メモの魔力』を読んで

心理カウンセリング学科3年

安達美豊

『メモの魔力』 幻冬舎

前田裕二著

「将来の夢はなんですか?」「趣味はありますか?」今までの人生で何回この質問をされたらうか。これらの質問を受けるたび「将来の夢は決まっておられません。」と同じ言葉を返してきた。また、面接の場では、将来の夢を問われた際に、偽りの夢を語ることにしかできない自分に情けない思いをしてきた。そして今では、就職活動を間近に控えた大学三年生になり、より一層「私は将来何がしたいのだろう」と心の底から疑問が湧いてくる。将来について考え始めるまでは、自分が就職して働く姿なんて考えもしなかった。ただ、学校やアルバイト生活、部活動や委員会活動に励み、さらに友達との交流など、自分がやり遂げたいことを精一杯にこなし、日々を楽しく、後悔ないように生きることだけを考えていたように思う。しかし、現在では就職活動を視野に何をしていくか決めなければならない状況になったとき、自分が何をしたいのか、何が好きなのかについて、不安や焦りと共に考えるようになった。

私が本屋に訪れた際に、一冊の本が目飛び込んできた。前田裕二著の『メモの魔力』だ。本書の帯に、「メモで自分を知る」「メモで夢を叶える」と書いてあったのである。まさに今の自分に必要なことだと感じ、自分を知り、夢を叶える方法があるのであれば、ぜひ知りたい、そして実行してみたいと思い本書を手にとった。

この本の内容は、メモを取ることで知的生産につながり人生が変わるというものだ。特に印象に残ったのは、第三章の「メモで自分を知る」の中にある、「人生の軸」を見つけることで、自分が何に幸せを感じるのかを知り、目指すべき方



向性がわかるという考え方である。つまり、「自分はこういうときに幸せを感じやすいから、こんなゴールを持ったら、すごく楽しくなりそうだ」と自ら人生設計を立てることが可能になるということである。しかし、ただ事実を記録していくメモでは人生は変わらず、もちろん自分を知ることもできない。では、どのようにメモを取れば良いのか。本書で幾度となく出てくるワードは具体化、抽象化、そして転用である。

抽象化とは、具体的な情報から何か言えることはないか、気づきはないか、他に応用は効かないかを考え、事象の本質を探る作業である。そして抽象化したものを、他に転用して生かす。しかし、ただ頭で考えるだけでは最大限の力は発揮されない。メモに書き、言語化することに意味があるのだ。理由は、マインドシェアの問題にある。紙に書くことで、潜在意識に刷り込まれ、マインドシェア率が高くなるのだ。事象に対して「考える時間が長ければ長いほど、そのために必要なことをブレイクダウンして考えたり、現在地点との距離を測ってその差分を埋めるための努力方法を見極めたり、また、妨げになりそうな障害や課題を潰していこう、という問題意識も芽生え」最良の結果にたどり着くことができる。これで人生が変わると筆者は言う。今までもやりたいことは考えて探して、悩んできた。それがメモで？というのが初めの正直な感想である。実際に変わるとしても、現実として自分に置き換えて考えることができなかつたのだ。しかし本書を深く読み進めていく中で、筆者がメモによって夢を叶えた実体験から、メモで人生が変わる、自分が何をしたいのか、そして人生の軸が見つかる何度か伝えているうちに、言語化することがどれだけ自分を知るには大切であるかということが徐々に理解できるようになった。

本書の巻末では、自分を知るための【自己分析 1000 問】という付録がある。そのうちの 1 問目の問いにある「なぜ自己分析をするのか、その目的は？」について、実際に自己分析をして、私の人生の軸について考えていこうと思う。私の答えは、自分のやりたいこと、自分にとっての幸せとは何なのかを知りたい、であった。次に自分の答えに対して、なぜそれを知りたいのか抽象化してみる。すると、人生を充実させたい、無駄にしたくないという答えが出た。この答えを得

て自身を振り返ると、なにか目標に向かって努力することが好きなこと、好奇心が旺盛であり子供の頃には気になった習い事は母にお願いをして習わせてもらい、さまざまな技術を習得することができたことを思い出した。このことから、私が自分を知りたいと思い、本書を手にとった本質に、人生を充実させたい思いがあったという気づきを得ることが出来る。この気づきは、考えてみれば当たり前のことかもしれない。しかし、自分の思いを巡って実際に言語化して紙に書いてみることで、自分の意識を敏感に感じ取れるようになったと思う。

ここで次に考えなければならないことは、人生を充実させるために、今何をすべきなのかである。結局、人生を充実させたいことが分かっても、それで夢や、自分の幸せは一体何なのかという疑問がすぐに解決するわけではない。人生を無駄にせず、充実させるためにどうするかについて、必要な要素をブレイクダウンして、今やるべきことについて考えた。すると、思い立ったらすぐ行動、という一つのアクションに辿り着いた。先延ばしにせず、すぐ行動に移すことで、様々な経験をすることができると感じたからである。その中で多くの事象を抽象化していくことで、自分のやりたいこと、自分にとっての幸せが何なのか、そして人生の軸を見つけることが出来るのだと思う。

この本を読んでメモに対するイメージが 180 度変わった。メモは単に事実を記録するのみではなく、知的生産作業であり、自分を知り、人生を変えるほどの魔力を持ったものなのだ。私はまだ、自分が将来何をしたいのかについて、答えは出ていない。しかし、今後も自己分析を続け、具体化、抽象化、転用を繰り返して、メモに書いていくことで、いずれ自分の知りたい答えが出るのではとワクワクしている。

「将来の夢は何ですか？」と聞かれたときに、はっきりと自信を持って答えることができる人はそう多くはないだろう。ましてや、持っている夢を叶えられる人はどのくらいの割合いるのだろうか。私は今までずっと自分はその少数にはなれないと思って生きてきたが、自分の行動次第で叶えられるものもあるかもしれないと本書をきっかけに感じた。焦らず本書で学んだことを生かして、自分のやりたいこと、人生の軸を見つけていきたいと思う。

佳作

## 『ふたり』を読んで

韓国語学科3年

早乙女 寧々

『ふたり』新潮社

赤川次郎著

主人公の実加は、中学生の女の子。高校生の姉、千津子と二人姉妹で、父、母との四人家族だ。姉の千津子は成績優秀でピアノが上手く、スポーツも得意で、演劇で主役を務めるなど先生や同級生からも慕われていた。そんな千津子は妹の実加にとって憧れの存在だった。千津子は妹想いで、いつも実加を助けてくれていた。しかし、ある日の登校中に交通事故に遭い、千津子は実加の目の前で突然この世を去ってしまう。死んだはずの千津子だが、千津子の声の実加にだけ聞こえるようになった。そして、姿は見えないが声となって実加にアドバイスをしながら見守り、支えてくれていた。姉の死でノイローゼになってしまった母、単身赴任する父の浮気、親友の父の死と心中未遂など実加の周りでさまざまな事件が起こる。この本では、実加が多くの困難を乗り越えながら精神的にも成長していく姿が描かれている。

主人公の実加と同じように、私にも歳の近い姉がいる。私と姉は正反対の性格で、幼い頃からぶつかることも多かった。私の行動一つ一つに干渉してくる姉を正直うっとうしく感じるときもあった。しかし、この本を読んで、妹の実加を見守りながら支えている千津子の姿から、姉という存在の大切さに気づくことができた。

考えてみると、私が何かに悩んでいた、辛いことがあって落ち込んでいたりする時に、誰よりも先に気づいて話を聞いてくれたり、私の好物を買ってきて励ましてくれるのは姉だった。現在は、就職して家を出てしまったが、頻りに連絡をくれて色々と相談に乗ってくれている姉は、私にとって実は大きな心の支

えなのかもしれないと思った。

また、私は一人の姉を持つ妹でありながら、一人の弟を持つ姉でもある。この本を読んだことは、自分が妹ではなく姉という立場で弟をしっかり支えてあげられているか考える良いきっかけにもなった。弟とは歳が離れているせいか、姉とのようにぶつかることはほとんどないが、その分理解してあげられることも少ないように感じる。普段から弟の些細な変化にあまり気づいてあげられず、元気がない姿を見ても、どう声をかけたらいいかわからなくて結局何もしてあげられない時もある。しかし、これからは姉のように、そして千津子のように、弟の気持ちに寄り添って見守りながら支えてあげられたらと思う。実加にとっての千津子、私にとっての姉という存在のように、私も弟にとって心の支えになってあげたいと思った。

千津子は交通事故で亡くなる最後の瞬間まで妹の実加を心配し、また励ましていた。私は死と直面した経験はないが、命が危ない状況でも妹のことを想う千津子にとても感動し、涙が出た。また、姉妹のあいだにある愛の強さを感じた。

この本で最も印象的だったのは、死んだはずの千津子の声の実加だけに聞こえるようになるという内容だ。死んだ人の声が聞こえるのは現実ではありえない奇妙なことで、最初は少し恐怖を感じた。しかし、本を読み進めていくと、実加のことを心配する千津子の想いが自然と声となって実加のもとに届いたのではないだろうかと考えられるようになった。

ある日、実加が家族とのやりとりでイライラしてしまい、千津子の声すら耳障りに感じて、「お姉ちゃんなんか、どこかへ行っちゃえ！」と言ってしまう場面がある。それから千津子の声はもう実加にも聞こえなくなってしまうのだが、これは千津子が実加の一言にがっかりしたからではなく、実加にはもう自分がついていなくても大丈夫だと安心したからだとは私は思った。千津子に頼ってばかりいた実加が、今はもう自分の力で生きていけるようになったことに、千津子は気づいていたのだと思う。

この本は、鏡に映った自分の姿を千津子と見間違えて驚いている実加に対して母親が「お前、千津子とよく似ているわ」という場面で終わる。この最後の場面

からは、憧れの存在であった千津子に近づいている実加の姿がうかがえる。実加は、千津子が事故死したあと大きく成長していった。友達の自殺を止めたり、父親を叱ったりとそれまでの実加だったら勇気が出せず解決できなかったような問題も、千津子の声を支えとして乗り越えていくことができた。また、親友の真子をなぐさめることができる優しさもいつのまにか身につけていた。

高校生という立場で、崩壊寸前の家族を支えるのは本当に大変なことだったと思う。しかし、実加の頑張りによって最後は両親を笑顔にさせることができた。私は、実加の成長に感動し、たくさんの勇気もらった。私も今よりもっと成長して、実加のように強くて、家族や友達など大切な人が大変なときに支えてあげられるような人になりたいと思った。

この本を読んで、家族や姉妹、友人をつなぐ愛のすばらしさに気づくことができた。また、普段のなにげない生活がどれだけ幸せなことなのか考えることもできた。今後、もしなにか困難に立ち向かわなければならないときがあったら、この本を思い出して、勇気を持って乗り越えていきたいと思う。

佳作

## 家族の在り方について

児童教育学科3年

1874003 井口己暖

『卵の緒』新潮社

瀬尾まいこ著

家族の在り方について、考えたことはあるだろうか。私は、ごく普通の家庭で育ち、家に帰ったら当たり前のように家族がいて、同じ家でご飯を食べて寝たりしているの、日常生活の中で家族の在り方について深く考えるような事は今までなかった。そんな中で、春学期の授業で「家族の心理」という授業を受けた。この授業では、家族の機能や時代による家族の変遷など、家族の在り方について学んでいくことがあった。そこで家族について興味を持ち、そのような本を読みたいと考えているとき、この本に出合った。

この本は2つの短編が描かれており、どちらも「血が繋がっていない家族」をテーマに書かれている。1つ目の短編『卵の緒』では、「僕は捨て子だ。」というインパクトのある書き出しで始まる。元々捨て子だという情報があるため、悲しい気持ちになる場面があるのかと思いきや、そのようなことは無かったのに驚いた。その理由として、主人公の育生の母親の性格の明るさと行動力が存分に出ていることが挙げられる。家族の証明としてあるへその緒のかわりに卵の殻を育生に渡したり、皆さんが想像する母親像とは少し違った部分が見えてくる。途中、育生のクラスの池内君が不登校になるシーンがあるのだが、その時にこの母親が言った言葉が深く印象に残った。ある日、朝ご飯ににんじんブレッドが出てきて、育生はこのパンを池内君にも食べさせてあげたいと考え始める。それを知った母親は、朝早いのににもかかわらず、迷わずに池内君に電話をするように言い、池内君の家に向かう。時間がたち、学校に遅刻しそうなので育生が家を出ようとすると、「学校なんてこれから毎日嫌っていうほど行けるわよ。池内君が我が家

に来るなんてめったにないでしょ？池内君と一日過ごすほうがずっと意味あるじゃない」と言い、半分押し切って学校を休ませた。簡単に述べてみたが、こんな母親がいるのかと率直に考える人が多いのではないだろうか。普通だったら、自分の子どもには無遅刻無欠席を目標に登校してほしいと思う。このように、突拍子もないことを言い出すことがあるが、それは全部育生を思っただけの行動だというのが、この本を読んでいくうちにとても伝わってくる。この母親がなぜこのように言ったのか。それは、育生に人との繋がり大切さを知ってほしいと考えたからではないだろうか、自分なりに考えてみた。

最後に、育生は母親に「結論は母さんと育夫は血が繋がっていないということ。そして、母さんは誰よりもあなたを好きだってこと」と、いつものテキパキとした口調で伝えられる。この母親はこの場面以外にも、日常生活の中でストレートに育生のことが好きだということを伝えている。気持ちを言葉に乗せてストレートに伝えることで、人と人との間には硬い繋がりが芽生えてくるのだとこの物語を読んで感じた。

2つ目の短編『7's blood』は、父親の愛人の子である弟の七生と、姉の七子の異母姉弟の物語であり、七生の実の母親は刑務所にいるという複雑な設定がある。『卵の緒』とは少し違い、半分血が繋がっているのだが、その半分だけという壁と七子の心情がとてもよく表れていた。七子の母親が入院することをきっかけに2人だけの生活が始まったのだが、七生の大人びている部分から、七子は七生に愛情が持てなかった。しかし、七生が七子の誕生日ケーキを渡せず、それがばれてしまったことをきっかけに、2人の距離が近づいていく様子がとても繊細に描かれている。先ほど述べたように、七生が小学生とは思えないほど大人びているので、最初は、どちらが言っているセリフなのかがわからず、読み返すことが多かった。しかし、七子の誕生日当日にケーキを渡すことができず、そこから4日間そのケーキを捨てることができなかつた七生の様子は、とても純粹で、七子にばれてしまった時の照れくささがとても小学生らしいなと感じた。そのため、七子が七生のことを愛おしいと思うきっかけになったことに、納得することができた。

七生の母親が刑務所から出てくる日が決まり、2人はまた別々の場所で暮らすことになった。その時、七子は七生の存在の大きさに気付く。しかし、別れる時悲しい様子などなく、わずかな記憶と確かな繋がりを信じ、未来に歩いていく様子が丁寧に描かれていた。ただマイナスに考えるのではなく、プラスの方向に向かって感情が動いていく様子に、とても心を打たれた。

私は、映画やドラマは視覚による情報があるため、感動的な場面で心を打たれ、感情移入して涙を流すことが多い。しかし、本を読んで泣いたことは一度も無い。そんな私が、初めて本を読んで涙を流したのがこの『卵の緒』である。大きな事件が起きるわけではないし、壮大な恋愛物語が描かれているわけでもなく、2つの家族の日常が描かれているので、劇的な変化というものがない。しかし、ストレートに伝わってくる言葉が多々あり、読んでいくと心が浄化されるような、気持ちが軽くなったような、そういった感情になった。

家族とは、夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、共同生活の単位となる集団と定義されている。しかし、「家族の心理」の授業で、従来の家族の定義に自分の家族が誰かを決めるのは自分という家族同一性（ファミリーアイデンティティ）の考え方が加わっていることを学んだ。この本は、この家族同一性という考え方が十分に描かれている。たとえ血が繋がっていなくても、その人のことがただ好きで、大切に思っているのならば家族なのではないだろうか。一度この本を読み、周りの概念にとらわれず、力強く生きる家族の様子を感じ、新しい家族の在り方について考えてみてほしい。



佳作

## 「幸せな人生における知能の必要性」

韓国語学科 3 年

谷本華古

『アルジャーノンに花束を』 早川書房

ダニエル・キイス著 小尾芙佐訳

幸せな、有意義な人生において何が一番大切なのだろうか。愛、友情、知能、富、名声など様々な要素が挙げられるが、幸せな人生を送るには、どんな要素が最も重要であるのだろうか。ダニエル・キイス作『アルジャーノンに花束を』を読んで、私は考えさせられた。

高校時代、一度本作を手にとってみたはいいものの、作品冒頭のひらがな祭りに読み進める意欲をかき消され、途中で断念してしまった。今回はこの機会にもう一度挑戦してみよう、という気持ちでこの作品を選んだ。

『アルジャーノンに花束を』はダニエル・キイスが 1959 年に発表した中編『アルジャーノンに花束を』を長編化した作品である。1966 年に発表、アメリカの SF ファンタジー小説の最高峰、ネビュラ賞を獲得した。2 年後には映画化、日本では 2015 年にドラマ化を果たした、SF 小説界隈で有名な作品である。主人公のチャーリー・ゴードンは生まれつき知的障害を持っており、パン屋の手伝いをしながら精神遅滞成人センターで「賢くなる」ために勉強をしていた。ある日、彼は大学の先生によって「賢くなる」手術を受けることになり、すでにその手術を受け、超知能を持つようになった白いネズミ、アルジャーノンに出会う。手術に成功し、天才となったチャーリーに新しい世界が開かれたが、それは必ずしも術前の彼が望んでいたような素晴らしいものではなかった。愛や友情、名声、科学、ヒューマニズムに翻弄されながら生きる物語である。

本作はチャーリーが書く「経過報告」という名の日記のようなものによって物語が展開されていく。前述の通り、作品冒頭、つまり術前の経過報告は殆どひら

がな、句読点もままならない、とても読みにくい文章である。高校時代の私のように、ここをつまづいてしまう人も少なくはないだろう。しかし、手術を経て、彼が様々なことを学んでいくうちに、漢字も増え、むしろ科学的な記述に関しては理解できないほどの水準の文章になる。

物語の中ではしきりに術前のチャーリーと術後のチャーリーを比較するような表現が登場する。手術によって彼は天才的な知能を得たが、術前のような明るさや健気さは知能の向上と共に彼の中から消え、友達だと思っていたパン屋の仲間からも、愚かなチャーリーは嘲笑されていただけだと彼は気づいてしまうのである。

「聖書を読んでごらんよ、チャーリー、人間ってもんは、主がはじめに教えてくださった以上のことを知りたがっちゃいけないんだってことがわかるよ。」

作中、パン屋の仲間のファニーが術後のチャーリーにかけての言葉である。手術によって賢くなったチャーリーは術前には知る由もなかったパン屋の仲間たちが笑っていた本当の理由を知ることになってしまったのだ。わからないことは知らない方が良い、知ろうとしない方が良い、ということ、作品を通して作者は伝えたかったのではないだろうか。

また、作中こんな台詞も登場する。

「知能だけではなんの意味もないことをぼくは学んだ。」

「高いIQをもつよりもっと大事なことがあるのよ。」

前者はチャーリーの言葉、後者はチャーリーの精薄者センターの先生であり、彼が想いを寄せるアリス・キニアンという言葉である。術前のチャーリーは「賢くなる」ために手術を望んだ。アリス・キニアンも、彼に手術を薦めた一人である。術前、彼らはチャーリーが「賢くなる」ことを望んでいた。手術に意欲的だったのだ。しかし、手術を受け、天才となったチャーリーは知能に精神、情緒が追い付いていない状態であったのである。頭「だけ」良くなったチャーリーの取柄と言えるものは何もなく、友達もおらず、さらに彼は想い人であるアリス・キニアンに術前のチャーリーの方が温かく良い人だった、などと言われてしまう。そのような状況で、彼に知能は本当に必要だったのだろうか。

本作は前述のチャーリーやアリス・キニアンという言葉のように「知能の必要性」を問うような場面が何度も登場する。その度に私は考えさせられた。幸せな、有意義な人生を送るために、「知能」は必要なのだろうか。私は今大学3年で、一般的には就職活動の準備を進める時期である。大企業や有名な企業に就職しようと思えば、学歴も重要になってくるだろう。良い大学に入る、ということはやはり「知能」が重要となり、就職の試験でもテストやグループディスカッションを行う際には「知能」が必要となってくる。しかしそれはあくまでも就職活動において、であって、必ずしも人生に必要な要素とは言えず、その上、大企業に就職することがすべての人において「幸せな人生」とも言えない。少なくとも私はそうだ。チャーリーのように天才的な頭脳を手に入れ一人大企業に就職するよりも、中小企業であっても仲間に恵まれた環境で助け合いながら仕事をする方が私の性に合っている。私はその方が幸せだと感じるだろう。しかし、ある程度の知能は必要だ。世間的に必要とされるマナーや知識がないと、就職はまだしも、友達を作ることさえままならないだろう。「幸せ」の定義にも個人差があるが、私は周囲の人に恵まれ、自分がやりたいことを好きなだけできる人生に幸せを感じるため、ある程度の知能は必要だが、チャーリーのような天才的な頭脳は必要ではない。

前述のチャーリーの言葉から、彼は手術を受けたことを若干後悔しているのではないかと推測することもできるが、彼の経過報告からはそのような言動は見られなかった。あくまでも彼は、術前には見るができなかった世界を、チャーリー・ゴードンの体を「借りて」見ているようだった。まるで、人間は知能だけでは意味がない、ということをも身をもって体験できて良かった、と言わんばかりに。このような彼の姿勢に、私はとても感心した。後悔しても意味がないなら、その後悔に意味を与えて肯定的に考えるという姿勢も、私がこの作品から学んだことである。

大学3年生、21歳、人生の岐路に立たされている私には、多くのことを考えさせられる作品だった。それと同時に、これから先、この作品のおかげで少しでも有意義な時間を送れそうな気がした。私は『アルジャーノンに花束を』に花束

を捧げたい。

## 2020 年度図書委員

|                 |         |
|-----------------|---------|
| 心理カウンセリング学科     | 田中 勝博   |
| 心理学研究科          | 加賀美 常美代 |
| 人間福祉学科（生涯福祉研究科） | 六波羅 詩朗  |
| 子ども学科           | 山中 智省   |
| 児童教育学科          | 小宮山 郁子  |
| メディア学科          | 馬場 一幸   |
| 社会情報学科          | 張 元宗    |
| 地域社会学科（国際交流研究科） | 石井 貫太郎  |
| 経営学科（経営学研究科）    | 竹内 進    |
| 英米語学科（言語文化研究科）  | 薬師 京子   |
| 中国語学科           | 胎中 千鶴   |
| 韓国語学科           | 申 貞恩    |
| 日本語・日本語教育学科     | 金澤 裕之   |
| 歯科衛生学科          | 佐藤 昌史   |
| 製菓学科            | 小田 耕三   |
| ビジネス社会学科        | 神山 直子   |
| <br>            |         |
| 新宿図書館館長         | 中山 博夫   |

2021 年 1 月 22 日発行

編集・発行 目白大学新宿図書館